看護大学生が受け持ち児とのコミュニケーションが取れたきっかけ

塩田　みどり[1)], 佐藤　みつ子[1)]
了徳寺大学・健康科学部看護学科[1)]

要旨

少子高齢社会が進む中，看護学生は子どもに接する機会が少なくなってきている．看護学生は他看護学領域の実習に比べコミュニケーションに困難を極めることがよくある．本学の学生においても，小児看護学実習に臨むにあたって，受け持ち患児に接することへの戸惑いを感じ，躊躇する学生が多い．そこで，本研究は，看護学生を対象に，患児とのコミュニケーションが取れたきっかけについて把握することを目的とし質的記述的研究を実施した．本研究の結果，学生が患児とコミュニケーションが取れたきっかけは，①患児が好きなキャラクターに興味・関心を向ける，②遊びを通して心を和ませる，③話しながら手を握り安心感を持たせる，④母親との関係づくりに努める，⑤実習病棟のスタッフや担当教員の接し方を見て参考にする等，それぞれの学生が患児とのコミュニケーションにおいて工夫していることが明らかになった．

キーワード：小児看護，実習，母親，コミュニケーション

The opportunity for nursing college students to communicate with their children

Midori Shioda[1)], Mitsuko Sato[1)]
Department of Nursing , Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University[1)]

【Abstract】

With the declining birthrate and again society, nursing students have fewer opportunities to interact with their children. Communication is sometimes more difficult than in other areas, and it is a common practice to be extremely difficult. When I attended the pediatric, I sometimes felt confused and hesitated to deal with the child in charge. However, from the results of this study, the reasons why the students were able to communicate with the patient ware (1) to focus on the character of the patient, (2) to soothe the mind through play, and (3) to hold hands while talking. It was found that they gave a sense of security, (4) tried to build a relationship with the mother, and (5)looked at how the staff and teachers the training ward interacted with each other for reference.

Keywords: pediatric nursing, practice, mother, communication

Ⅰ．はじめに

少子高齢化がますます進む中で，若い世代においては，住環境の変化や科学技術の進歩により，これまでに比べ，人間関係の希薄化や生活体験の不足が進んでいる[1)]．これらの社会的変化に伴い，子どもと接する機会が少なくなってきている学生にとって，小児看護学実習が何かしらのプレッシャーになっているのではないかと考えられる．

小児看護学実習における先行研究においては，他領域に比べて，患者とのコミュニケーションにおいて

も「困難度」が高く「解読」や「問題解決」が低く「ネガティブ情動」が高いことを報告している[1]．特に，乳幼児の場合，啼泣や表情・機嫌など，非言語的コミュニケーションの手段が必要になり，学生は，このような子どもの反応を「解読」できず，対応に戸惑い，ネガティブ情動も強く，困難度が高いとの報告がある[2]．

また，小児看護学実習において，看護学生が子どもと関わることを躊躇させる影響要因として小代[2]によれば①親の存在による心理的負担，②苦手と感じた子どもの姿，③否定されたと感じる子どもの反応などが挙げられている．そのことから考えても母親とのかかわりを通して信頼関係を築く必要がある．子どもと家族との信頼関係を築くには，出合ったその日から，自分の価値観や理想にとらわれず，ありのままの子どもと家族を捉え，コミュニケーションを重ねることが必要である[6]．患児にとって初めての入院であるときには，母親も同じ立場なので思いや行動を受け入れ，尊重していくことが重要である[7]．言葉でのコミュニケーションがとりにくい乳児については，泣くことが多くても，逃げずに抱いてあやすようにするとよい[9]．看護学生は，受容･傾聴･共感する姿勢で幼児と接することで、交流を深めることができ，「接しやすい雰囲気をつくる」「思いやりを持って言葉をかける」ことで初対面の幼児と関係を築くことができると言われている[10]．

先行文献から看護学生は，発達の特徴や状況に応じたコミュニケーションを取るきっかけを探しながら実習に臨んでいることと考えられる．そこで，小児看護学実習を終了した学生に患児とのコミュニケーションをどのように行ったのかを把握することにより，苦手意識がある学生への指導に役立つのではないかと考えた．

Ⅱ．研究目的

看護大学生が受け持ち児とのコミュニケーションが取れたきっかけについて明らかにする．

本研究における「きっかけ」とは，学生が受け持ち患児とコミュニケーションがとれるようになった手がかり，事柄，理由となるもの，原因や動機と定義する．

A大学においての病院や保育園等で実施された小児看護学実習の概要に基づき，分析することにした．実習目的では，「小児各期の成長発達の特徴と健康段階による小児と家族への影響を理解し，健康段階に応じた小児看護を実践するために必要な基礎的能力を養う」があげられている．

また，実習目標では，以下の5項目があげられている．１）小児の日常生活を通して，成長発達段階を理解できる．２）小児に適したコミュニケーション方法を考え実践できる．３）健康を障害された小児の病態生理・治療を理解し，健康の回復と成長発達の促進を考慮した看護を理解し，実践できる．４）小児をめぐる保健･福祉･教育の各機関との連携の重要性を理解し，看護の役割について考えることができる．５）小児との関りを通して，小児の最善の利益を遵守するための小児看護観を育むことができる．

Ⅲ．研究方法

１．研究デザイン

質的記述的研究

２．対象者

A大学４年生４名

面接の前に研究の趣旨や倫理的配慮について説明し，研究への同意が得られた4名を対象者とした．

３．データ収集方法

A看護大学４年生で研究目的，方法，参加は自由であること，成績に影響のないことを説明し理解を得て協力可能な女子学生４名に，面接はインタビューガイドに基づき半構造化面接法を用いて実施した．面接は対象者と研究者の1対1で行い対象者1名に対して1回実施（所要時間20～40分程度）とした．インタビューガイドは,①受け持ち患児の年齢,性別②疾患名③入院目的④受け持ち児とどのようにコミュニケーションを取ったのか⑤コミュニケーションが成立したきっかけは何か（どのようなところにあったのか）等についてである．学生の許可を取りICレコーダに記録した.

４．分析方法

面接内容の逐語録を分析対象とし，質的帰納的に分析した．逐語録を熟読し，どのように
コミュニケーションをとったか，コミュニケーションが成立したきっかけに関する記述部分の意味を損なわないように，語りを抽出し，意味内容を要約しコード化した．次にコードの意味の類似性，相違性に基づき分類しカテゴリーを生成した．分析結果の信頼性，妥当性の確保のため，分析過程において，共同研究者間で文脈の内容とカテゴリー化を確認し合意を得るまで繰り返し検討を重ねた．ひとりひとりの学生が受け持ち患児とどのようにコミュニケ－ションをとったのかを患児とのかかわりの経過からコミュニケ－ションがとれたきっかけはどんなことだったのかを把握した.

５．研究期間：2015年10～12月

６．倫理的配慮

本研究の目的と方法について文書と口頭で説明を行った．また，研究協力学生のプライバシーについては,十分に配慮した．データ収集を行い,面接内容のICレコーダーへの録音また筆記による記録とそのデータは研究終了後責任をもって破棄すること，全研究過程で匿名性が保証されること，個人の守秘義務が守られること，いったん同意しても撤回は自由であること，教員の依頼であるが，参加を拒否しても成績やイメージの変化に影響がないことが保証されていることを伝えた.

そのうえで，所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号2712).

Ⅳ．結果

１．研究対象者（受け持ち患児の状況）

研究対象の受け持ち児の年齢，性別，疾患名，入院目的は表１のとおりである.

表１　受け持ち患者

	年齢・性別	疾患名	入院目的
学生A	５歳　女児	アデノイド扁桃腺炎	手術目的
学生B	５歳　女児	紫斑病	治療目的
学生C	10か月 男児	三尖弁閉鎖症	手術目的
学生D	３歳　女児	先天性心疾患	心臓カテーテル検査目的

２．受け持ち患児の健康状態と患児とのコミュニケーション

１．学生Aの場合

患児は，5歳11か月，アデノイド扁桃腺炎で1週間入院していた女児である．最初の印象は，点滴していることが嫌なこともあり機嫌が悪く，お互い初対面であることもあり，緊張していた．家族は，午後3時から入室できる病院だったため日中はいない状態だった．年齢相応の理解力はあるが，治療が嫌だと意

思表示したり，不安の表出についてはっきりしていた．小児の場合，敬語を使っても通じにくいものがあると考え，どのように声掛けをしたらよいか迷った．そこで，看護スタッフや教員の接し方を真似すればよいかもしれないと思った．患児も入院・手術に対し不安な状態であり，また学生と初対面であったことから緊張していたが，会話中手を触ってみたら握り返してくれそこで距離が縮まった感じがした．ベッドサイドで話して，小さい手で握り返してくれたことが嬉しかった．最初に手を触ったときは，勉強しているところであいさつに行って，こっちを見て話してくれた．きっかけとしてスキンシップをしてみようと思った．その結果，握り返してくれてそのまま手をつないだまま話すきっかけになった．また，勉強が好きな患児で小学校に入るのを楽しみにしており勉強したいと言っていたため一緒に勉強に取り組んだ．

母親や祖母が手術のために面会にきており，情報を得ることができた．しかし，母親は手術前・術後共に緊張した様子があり，話しかけにくく教員と相談して挨拶だけにしていた．

母親とは直接話せた機会は少なかったが，最終日に真面目で一生懸命頑張ってくれてありがとうございましたという言葉を聴くことができた．母親が自分をどう思っているのか不安だった中，安心できた一言だった．

具体的な学習指導では，教科書を見て簡単な算数，リンゴがいくつあるかなどの問題を出し，できたら褒めると喜んでくれたり，一緒に考え学習を指導した．お気に入りの絵本を読み聞かせてほしいと言うので読んだところ，患児から話かけ喜んで説明してくれた．喉の痛みがあり食事があまり食べられなくてどうかかわったらよいか戸惑った．看護スタッフに相談したら，お話しながら，気をそらしながら食べてもらうことが一番大事だからと指導を受け，看護師スタッフが援助すると最終的には上手に食べさせるのを見た．

実習最終日，患児は，未熟児で出生した話しを祖母から聞くことができ，今回の入院では，母親は過剰なっているが，普段はそのようなことはないことを聞き安心できた．

２．学生Bの場合

5歳の女児，紫斑病の急性期．最初の印象は，腹痛が強く母から離れず機嫌が悪く近づきにくかった．この状況で学生一人で行くと,「だれ，この人」と言う目で見られてしまうのではないかと考えた．そこで，看護スタッフか教員と一緒に行くことを思いついた．入院して間もない日で，本人も疾患の症状から腹痛があったため機嫌が悪く，母親にしがみついていた．病室に行く時には看護スタッフか教員について機嫌を損ねないようにデリケートに対応した．実習1日目か2日目に，母親からもともとはこんな人見知りする子じゃないこと，入院してから人が変わったみたいという話で，入院しているこの女児の姿は、本来の姿じゃないということがわかった．何かきっかけがあれば心開いてくれるかなと考え好きなものは何かを探した．学生Bは，たまたま患児が好きなキャラクターのワッペンをつけていた．それを見て学生Bに興味持ち始め笑顔が見られるようになった．母親からも患児に「お姉ちゃんこのワッペン付けてるよ．ほら見て」言ってもらうことができた．そこがきっかけで会話ができるようになった．そのキャラクターが好きみたいで，ベッドの周りも同じキャラクターのタオルで，お人形もたくさん持っていた．どう話しかけていいか本当にわからない中，キャラクターを通じて話しをすることができたことがきっかけとなった．

３．学生C場合

10か月の男児，三尖弁閉鎖症，最初の印象は言葉でのコミュニケーションがとれず，受け持ち児が何で泣いているか分からず，対応が難しいと感じ戸惑った．10か月の乳児は，言葉でのコミュニケーションができないため，泣いている時にはどうして泣いているのかわからないことが多かった．しかも子どもに接

する経験が全くなくて戸惑った．バイタルサイン測定の時は，母親にあやしてもらい測定した．泣き止まなかったことが多かったが，母親から決まったおもちゃが好きだという情報を得て声掛けをしながら測定した．小児のバイタルサインを測ることはなかったが小児のあやし方や接し方を母親に教えてもらい，少しずつ慣れきて笑顔がみられるようになった．

４．学生Dの場合

受け持ち児は3歳の女児で心臓カテーテル検査目的の入院だった．おとなしい女児のため学生から話しかけないと話してはくれなかった．そのため，最初は，患児も学生たちも緊張し学生から話しかけないと話してくれるということはなかった. 母親は, 指輪とかブレスレッド等でいつも遊んでいるおもちゃを持ってきていた．また絵本や折り紙で遊んだら笑顔になった．このキャラクター好きなのって聞くと,「好きいー」っていう風に言ってくれるので，持ってるものを見るとそれが好きなものだったりした．最初はバイタルサイン測定も, 嫌がられたが, 母親が協力してくれた．母親が患児に「ご本読んでもらいな」と言ってくれた．バイタルサインも指輪で遊ぶ前は, 触られるのも嫌だっていう感じだったが, おもちゃなど持ってきてくれて遊ぶと遊びながら血圧を測定させてくれた．血圧計も実際に触らせて，不安感が取れたりした．学生は遊ぶことを通して，患児が安心して入院できるようにサポートできる．看護スタッフの援助方法を見学することは，学ぶことが多かった。

５．受け持ち患児とコミュニケ－ションがとれたきっかけ

学生が受け持ち患児とコミュニケ－ションが取れたきっかけは，【患児が好きなキャラクターに興味・関心を向ける】,【遊びを通して心を和ませる】,【話しながら手を握り安心感を持たせる】,【母親との関係づくりに努める】,【実習病棟のスタッフや担当教員の接し方を見て参考にする】の5つのカテゴリ－，＜流行のキャラクターの話題＞，＜おもちゃ・絵本などを使った遊び＞，＜お母さんの協力で看護ができた＞等, 15サブカテゴリ-,「好きなモノ, 」キャラクターを通して興味をもち始めて笑顔がみられるようになった」等の42コードが抽出された（表２）.

表２　患児とのコミュニケーションが取れたきっかけ

5カテゴリー　15サブカテゴリー　　主なコード42

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
患児が好きなキャラクターに興味・関心を向ける	流行のキャラクターの話題	好きなモノ，キャラクターを通して興味を持ち始めて笑顔が見られるようになった(2)
		お母さんの方からも子どもにキャラクターのワッペン付けてると言ってもらえた
		ベッドの周りも好きなキャラクターのタオルやお人形でいっぱいだった
	身に着けているキャラクター	ブランケットがキャラクターものだった
		好きなものを見つけてあげるのも仲良くなるポイントである(3)
遊びを通して心を和ませる	遊びを利用した勉強	勉強が好きな子だったので，小学校に入るの楽しみにしていた
		簡単な算数，リンゴがいくつなど，問題出して遊んだ
	遊びを活用した看護	おもちゃとか持ってきてくれて遊ぶと遊びながら血圧など測らせてくれる
		血圧計を見せこれでキューッてなるんだよと触らせたら測らせてくれた
	おもちゃ・絵本などを使った遊び	指輪だったり，音が鳴る本を使って遊んだ(3)
		お母さんが選んだおもちゃで遊ぶと上手くいった(3)
		学生が作ったリボンやワッペンを気に入ってくれた（2)
	信頼関係が築けた	昨日お姉ちゃん（学生）とこれ，描いたんだよと嬉しそうだった
		何が好きなのか傾向をよく聞いて遊ぶ(2)
	遊びを楽しみにしてくれた	これで遊ぼうというと楽しみにしてくれた(3)
		患児と遊んでく中で，いろいろ話をしてくれて，仲良くなれた
話しながら手を握り安心感を持たせる	困難感を感じながらも話せた	話しかけないと話してくれるということはない
		ベッドサイドに行って話しているときに近づいてもいいんだと安心した
	スキンシップをしながら話した	一回手を触ってみたら握り返してくれて距離が縮まった
		ベッドサイドで話して小さい手で握り返してくれてしゃべれるようになった
		最初に手を触ったときは、こちらを見て話してくれた
		手を握ってみたら握り返してくれて，つないだまま話しをした
母親との関係づくりに努める	母親に近付きづらい	実習初め，お母さんの方は疲れてるような様子が見られた(2)
		実習初めは，午後お母さんが来てからは学生は控室にいた
		実習初めは，お母さんから離れず他の人は受け入れたくないみたいだった
		お母さんには，どう思われるか不安，緊張があった（3)
	母親に近付くための行動	少しずつ顔出してお母さんとも話しをした(2)
		学生が患児にうまく関わっていければお母さんとも関係ができる
		礼儀・マナーに気を付ける(３)
		回復過程をお母さんと一緒に喜んだ(2)
	母親の協力で看護ができた	患児のあやし方をお母さんに教わった（５）
		このおもちゃが好きなんだということをお母さんから聞いた(2)
		お母さんと一緒に頑張ろうねって声掛けしながらケアをした
	母親から貰えた言葉	患児と積極的に関わっているとお母さんから話しかけてきた
		最終日にお礼の言葉を聴かせていただいた
実習病棟のスタッフや担当教員の接し方を見て参考にする等	スタッフ，教員に指導を受けながら実践した	看護師さんの接し方，先生のマネをするカタチから入った
		最初は実習担当の看護師ともしくは，担当の教員の先生と一緒に関わった
		スタッフにどこまで手を出すかというのは良く考えて行動するよう言われた
	スタッフの看護を見ることで学べた	看護師さんとかのケアの仕方を見学してみることで，学ぶことがたくさんあった
		看護師さんの方法を見るのは，すごい勉強になった
		ナースステーションにいるといろいろ見て学べる
		スタッフの対応方法は，見て学べた

1)【患児が好きなキャラクターに興味・関心を向ける】

このカテゴリーは，≪流行のキャラクターの話題≫，≪身につけているキャラクター≫2つのサブカテゴリー，5コードであった．幼児にとって好きなキャラクターの持ち物を持っていれば，その話題になると自然に子どもは笑顔になり会話も弾んだ．

2)【遊びを通して心を和ませる】

乳幼児期における子どもの発達は，遊びによって促されることが多い．このカテゴリーは，≪遊びを利用した勉強≫≪おもちゃ・絵本等を使った遊び≫≪遊びを楽しみにしてくれた≫等5つのサブカテゴリー，11コードからなった．入院生活の中では，限られた空間で遊ぶことの幅が通常より狭まってしまうことはあるが，その状況の中でもできる遊びを取り入れることは，患児にとって信頼関係が築け，和やかになれる．

3)【話しながら手を握り安心感を持たせる】

入院している幼児は，慣れない環境から不安や恐怖を感じやすいことが多く，ストレスを抱きがちである．≪困難を患児ながらも話せた≫≪スキンシップをしながら話した≫2つのサブカテゴリー，6コードからなり，学生は，子どもに接する機会が少ないことが多く話しかけるにしても躊躇することが多い．しかし，手を握るなどスキンシップをはかることでより良い関係ができ，話やすい状況が作れば，それがコミュニケーションの手がかりとなっている．

4)【母親との関係づくりに努める】

≪母親に近づきにくい≫≪母親に近づくための行動≫≪母親からもらえた言葉≫等4つのサブカテゴリー，13コードからなり，入院当初は，子どもの体調がすぐれず，泣くことが多く母親にとっても対応に負担がある中，学生に気を配る余裕はないものと思われる．患児と母親の様子を見ながらタイミングを考え訪室して，熱心に実習している学生の姿を見て信頼関係ができていることと思われる．

5)【実習病棟のスタッフや担当教員の接し方を見て参考にする】

泣いたりぐずっている患児とコミュニケーションをとることは，学生にとって至難の業と言える．≪スタッフや担当教員の指導を受けながら実践した≫≪スタッフの看護を見ることで学べた≫2のサブカテゴリ-．７コードであった．学生は，どうしてよいかわからないことを指導に当たっているスタッフもしくは教員に相談し，実際の対応方法をみて学んでいる様子があった．

V．考察

1．カテゴリー分類からの考察

このカテゴリーのなかで一番多く語られたのは，「母親との関係づくりに努める」であった．実習初めは，患児の体調不良があったりして，母親との会話も思うようにできなかった．母親に近づくために礼儀正しく接し少しずつ顔を出すようにしてあやし方を教わり関係づくりに努めることで対応することができた．次に多かった「遊びを通して心和ませる」「患児が好きなキャラクターに興味関心を向ける」と関連するところがあり，遊びを通して関係が深まった様子が伺われた．カテゴリーの数としては５つ目あるが，「実習病棟のスタッフや担当教員の接し方を見て参考にする等」は，患児近づく最初のきっかけづくりのヒントになった．

2．受け持ち児とのコミュニケーションが取れたきっかけ

小児看護学の実習目標のひとつとして，「小児に適したコミュニケーション方法を考え，実践できる」を掲げている．学生は，この目標を達成するために，「受け持ち児とどのようにコミュニケーションをとり，

そのきっかけはどのようなことだったのか」を学生のインタビューから明らかにした．その結果，学生が受け持ち患児とコミュニケーションが取れたきっかけは，①患児が好きなキャラクターに興味・関心を向ける，②遊びを通して心を和ませる，③話しながら手を握り安心感を持たせる，④母親との関係づくりに努める，⑤実習病棟のスタッフや担当教員の接し方を見て参考にする等，5つであった。

まず，学生が，患児の好きなキャラクターに興味・関心を向けたことは，身につけているキャラクターが子どもにとって自分の味方であり，安心感につながる．また患児の発達段階から好きなキャラクターがなにかを探り当てたことについても発達段階に合わせた遊びを取り入れたからと考える．さらに，家族関係のみでなく受け持ち患児の入院する前の普段の生活がどうなのかを探り，保育園あるいは幼稚園に行っているのか，誰とよく遊ぶとか普段のことをよく聞いてから何が好きなのかの傾向を聞いて，一緒に何をやろうか考えると接しやすくなる．学生Dの特徴的なかかわりは観察力が優れていることである．受け持ち患児が，持っているものを見てどのキャラクターが好きなのか，看護スタッフの動きを観察し参考にしたことがコミュニケ-ションの手がかりとなったと思われる．キャラクター等，身近な話題は内容が理解しやすく伝わりやすいのでコミュニケーションのきっかけになったと考える．

遊びを通して心を和ませたことが，コミュニケーションのきかっけとなった．幼児は感受性が強い．ちょっとした表情や態度にも敏感に反応するため，言動には十分注意し，笑顔でやさしい言葉がけを意識し行動したからと考える．遊びを通した関りは児にとって成長発達を促すことに役立つ．子どもは入院していても日々成長している．遊びを通した関りのなかで今までわからなかったり出来なかったことができる場面に出会う機会は入院中でも多いことを学ぶことができる．また強い口調で叱る，強制的に処置をするなどの対応は，ますます抵抗や拒否が強くなる恐れがあるため，根気強く関わっていくことが大切である．しかも，遊びを通して心を開いてくれたと感じることができた．さらに，よく観察して話をすると好きなものだと喜んで返事してくれたりするので，それも仲良くなるポイントであると考える．さらに，家族関係のみでなく受け持ち患児の入院する前の普段の生活がどうなのかを探り，保育園あるいは幼稚園に行っているのか，誰とよく遊ぶとか普段のことをよく聞いてから何が好きなのかの傾向を聞いて，一緒にこれやろうか考えると接しやすくなる．

話しながら手を握り安心感を持たせることが，コミュニケーションのきっかけとなったのは，手を握る，ハグをするなどのボディーランゲージは，幼児に安心感をもたらす重要なコミュニケーションの一つになると言われている．時には幼児に触れても大丈夫か，事前に母親や祖母に確認することも必要である．入院している幼児は，慣れない環境から不安や恐怖を感じやすいことが多く，ストレスを抱きがちである．学生Dの場合，患児から話さなかった．幼児期は語彙量が少ないため頭の中の考えを上手く表現することができないため，学生から話かけ，患児の考えを話してもらうようにしていたことが，患児に自信を持たせたことが効をそうしたとか考える．

母親との関係づくりに努めたことが，コミュニケーションのきっかけとなったのは，　小児看護では，対象者のみでなく家族，特に母親とのかかわりから多くの学びを得ることがある．10か月の乳児の場合，言語的コミュニケーションができないため母親との関わりが重要である．また少しずつ回復し患児が笑顔になっていく状態を母親と確認しあうことは母親に安心感を与えることになり，共に確認することの重要性に気付いた．今回これらの人々と患児を囲み回復の経過を追って笑顔が見られるようになり回復過程を観察することができたのは看護にとっての喜びになっていた．自然と母親との良い関係を築くことができていた．

実習病棟のスタッフや担当教員の接し方を見て参考にしたことが，コミュニケーションのきっかけになったのは，学生Aの場合，最初に患児に話しかけるとき，敬語をどのくらい崩したらよいか迷っていた．その時考えたことは，看護スタッフや教員の真似である．看護は，対象と看護師の人間関係を基盤として成り立つものである．そのため，看護師は，幼児期の子どもは言語能力が低いため，それを補うために看護師の表情をよく見ている．そのため，話の内容にあわせて「大きく頷く」や「表情を顔に出す」など、少し大げさなくらいにリアクションをとることで，非言語コミュニケーションをとるようにしていた．その時，気づいたことは，看護スタッフや教員の真似である．看護は，五感を働かせるだけでなく，それ以上の第六感（直観）も働かせ患児の微妙な変化に気づく力が必要である．どのように話しかけたらよいか，一人で考えるだけでなく，教員や看護スタッフの行動を観察し，具体的な行動を考え出していることがうかがえる．教育は，共に育つことで道が開かれる．学生Aのコミュニケーション能力のステップアップにもつながったと思われる．学生Bの場合，紫斑病の急性期で腹痛が強く，状態が悪い時に受け持つことになった．どう近づいたらよいのか分からない時に思いついたのが，看護スタッフ，教員同行で訪室することであり，このことも患児に恐怖感を与えずコミュニケーションのきっかけになる方法であったと考える．

３．小児看護実習における円滑なコミュニケーションをとれるための指導

言語的コミュニケーションがとれる幼児，非言語的コミュニケーションしかとれない乳児等の場合，看護学生の指導においては，個々の発達課題や個性を把握し，コミュニケーションのきっかけをつかめるようにすることが重要である．学生が患児とのコミュニケーションがとれたきっかけには，①患児のキャラクターに興味・関心を向ける，②遊びを通して心を和ませる，③話をしながら手を握り安心感を持たせる，④母親との関係づくりに努める，⑤実習病棟のスタッフや担当教員の接し方を見て参考にする等であることがわかった．

患児と直接かかわる体験ができる実習は，学内で学べない知識や技術を身につけられる教育の場であり意義が大きいと考える．その意義は，学生と異なる年齢層の患児，母親からは，泣かさないようにどうあやすか，子育て経験を教えてもらいそれを活かしていた．それぞれの学生が初めて受け持ち患児に接する中で，学生自身も自分の個性を活かしどうしたらよいかを模索していた．困ったときには病棟スタッフの行動や指導者または教員の接し方を参考にしたり，相談しながら実習を進めていた．学生の患児との関わりを見守り，学生がどのようなきっかけでコミュニケ－ションがとれたのか，とれないのか等，個々に面談をしたり，共通理解のカンフレンスを設けることが，幼児・乳児とのコミュニケ－ションを円滑にする上で必要，かつ重要ではないかと考える．また，教員はいつでも相談できる良きアドバイザーであるように努めることが重要であることを再認識した．

Ⅵ．結論

小児看護学実習に臨むにあたって，受け持ち患児に接することに戸惑いを感じ躊躇することもあった．しかし，本研究の結果から，学生が患児とのコミュニケーションがとれたきっかけは，①患児のキャラクターに興味・関心を向ける，②遊びを通して心を和ませる，③話をしながら手を握り安心感を持たせる，④母親との関係づくりに努める，⑤実習病棟のスタッフや担当教員の接し方を見て参考にする等，であることがわかった．

＜参考・引用文献＞

1）阿部知美（2013）．患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解読，問題解決，感情との関連．日本看護研究学会雑誌Vo36 No.1，149－155

2）小代仁美，楢木野裕美（2010）．小児看護学実習において看護学生がこどもと関わることを躊躇させる影響要因．日本看護研究学会雑誌Vo33 No.2，69－76

3）合田友美，阿部裕美，佐藤佳代子（2012）．小児看護学実習において母親との関係形成のために看護学生がとる行動の実態．川崎医療短期大学紀要32,39-43

4）E.H.エリクソン，岩瀬庸理訳（1973），アイデンティティ － 青年と危機 － ，金沢文庫

5）厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（2011）

6）濱田米紀他；第2章　子どもと家族との信頼関係の構築，小児がん看護ケアガイドライン2018，http://jspon.sakura.ne.jp/download/jspon_guideline/（2021.08.01　21：00　アクセス）

7）野村 香代（2020）．タッチングとホールディング：with NEO（2434-4540）33巻4号 564-565

8）松田香奈（2010）ネフローゼ症候群で入院している幼児の看護を振り返って～児の行動の変化に向けた関わりについて～．川崎市立川崎病院事例研究集録 12回 22-25

9）堀喜久子(2003)実習で困らないための患者との対応術～幼児期患児とのコミュニケーション～．ナーシングカレッジ7巻11号63-68

10）吉澤幸（2021）初対面の幼児と関係を築く学生の実践演習～領域「人間関係」との関連性～」，共生科学第12巻

11）上田厚作　松本昌治（2010）保育・教育実践演習に求められる教育内容と課題－新任保育者に求められる能力等に関する追跡調査結果からの考察－，越谷保育専門学校研究紀要第4号

2021年11月29日　受理

了徳寺大学研究紀要　第16号